

## George H. Mead 研究

——特に彼の「社会的行動主義」の視座と「自我」論を中心に——

小笠原 真

(奈良教育大学社会学教室)

(平成2年4月23日受理)

### I. はじめに

アメリカの社会学者であり、社会心理学者でもあり、また哲学者でもあった George H. Mead (1863—1931) が、この世を去ってから既に60年近くの歳月が流れているにも拘らず、その研究業績についての議論は後を断たないのみか、近年一層活発になってきたような感じさえわれわれには抱かせる。これは、「アメリカの社会学者多数は、デュルケーム、ヴェーバー、フロイト、ミードの偉大な業績を十分に吸収しなかった者は、なおその所説を19世紀的伝統の改訂に立脚している」<sup>(1)</sup>とまでいわしめている点もさることながら、Meadの研究業績に多くの優れた洞察が含まれてはいるが、同時に曖昧な部分も存在しており、その可能性が十分汲み尽せないのに加えて、アメリカの社会学者であった Talcott Parsons (1902—1979) を頂点とする「構造機能分析」(structural-functional analysis) に挑戦する旗印を掲げて、1960年代以降急速に台頭してきた「象徴的相互作用説」(symbolic interactionism) の源流が、まさに Mead の所論にあるからであろう。

ところで、「象徴的相互作用説」は、シンボルを通じての人間の相互作用に焦点を置き、そこにおける人間の「解釈」(interpretation) 過程に着目し、そこから人間の主体的あり方を明らかにしようとする理論である。だが、その「象徴的相互作用説」も、今日ではその内部で分化が目立ってきている。すなわち、Herbert G. Blumer (1900— ) を中心とする伝統的な「シカゴ学派」(Chicago school) をはじめとして、Manford H. Kuhn (1911—1963) に率いられた「アイオワ学派」(Iowa school)、Erving Goffman (1922—1982) に代表される「ドラマツルギカル・アプローチ」(dramaturgical approach)、そして、Harold Garfinkel (1917— ) が先頭に立って提唱する「エスノメソドロジー」(ethnomethodology) などの分化がいうならばそれである。

したがって、本小稿はこうした分化した「象徴的相互作用説」を個々に取り上げて、逐一吟味することもさることながら、こうした諸説の源流をなし、彼らが自らの父と仰ぐ Mead の所論こそ、まずもって検討しなければならないであろう。こうした認識に立って、われわれはその手初めとして、Mead の生涯と業績をみ、次いで、Mead の「社会的行動主義」(social behaviorism) の視座を解き明かし、続いて、Mead の社会学や社会心理学における主要関心が、何といても「自我」(self) 論にあったので、彼がその論を展開するにあたって真に意図したところの含意を出来るだけ正確に汲み取ってみたい。そして最後に、われわれは Mead の所論わけても彼の中心テーマであった「自我」論に含まれる問題点・疑問点を若干指摘して結びに代えたい。

## II. Meadの生涯と業績

さて、個々の学者の学説を理解する際の常道に従い、George H. Meadの生涯と業績を手短に紹介することから始めよう。

まず、Meadの生涯について触れてみると、彼は1863年2月マサチューセッツ州サウス・ハドリー (South Hadley) でこの世に生を享けた。父のHiram Meadは組合教会の牧師であり、オハイオ州オーバーリン(Oberlin)に新たに出来た神学校に招かれて、説教術の講座を受けもつことになり、Mead一家はニューイングランドから中西部に移ることになった。この時Georgeは7歳であった。母のElizabeth S. B. Meadはオーバーリン大学で教鞭をとったこともある学者であった。そして、両親共清教徒 (Puritan) であって厳粛な家庭のために、Georgeの少年時代の読物は小説などは殆どなく、専ら歴史の本ばかりであった。

長じて、1879年16歳の時、Meadはオーバーリン大学に入った。当時のオーバーリン大学は古典教育が中心であり、彼はギリシア、ラテンの詩や文学を学んだ。しかし、彼がまだ成人しないうちに父親が死に、家族はやむなく家屋敷を売り払って、借家住いをするようになった。早くから辛苦と貧困とを味わいながらも、82年Mead20歳の時同大学を卒業した。そして、彼は直ちに教師として小学校に勤めたが、勉強嫌いの子供達に遭遇し、まったくお手上げの状態になってしまい、僅か4カ月間の短さで辞めてしまった。その後約3年間ウイコンシン中央鉄道会社で測量の仕事をしたが、雪の深い冬期には測量の仕事も出来ず、家庭教師などをして暮らす間に次第に勉強の意欲が湧き、1887年の秋ハーヴァード大学に首尾よく編入した。この時既に彼は24歳であった。ところで、この大学でのMeadの主な関心は哲学と心理学であり、哲学者のJosiah Royce (1855-1916) と哲学者で心理学者でもあったWilliam James (1842-1910) の講義をよく聴いた。そして、前者のRoyceの影響のもとでGeorge W. F. Hegel (1770-1831) の書いた本をよく読んだし、後者のJamesは「自我」の心理学を初めて体系化した人であるので、後にMeadが「自我」論を展開する内面的な動機を植え付けたことは想像に難くない。彼は88年度のクラスでハーヴァード大学を卒業し、88年の秋から91年の秋にかけての3年間ドイツに留学し、ライプチヒ大学とベルリン大学で哲学と心理学とを研究した。この頃特にMeadはドイツの哲学者で心理学者でその上言語学者でもあったWilhelm M. Wundt (1832-1920) の著作に親しみ、後に彼自身が重視する「身振り」(gesture) の概念を学んだ。また、留学中に彼はKarl H. Marx (1818-1883) の著書を読んだ形跡も残している。

1891年10月にベルリンでMeadは、既にオーバーリン大学の頃からの親友であったHenry Castleの姉Helenと結婚し、すぐにアメリカに帰り、運よくミシガン大学の哲学・心理学部の講師となった。ここで彼に大きな影響を与えた人々に、哲学者で教育学者でもあったJohn Dewey (1859-1952) や社会学者であったCharles H. Cooley (1864-1929) らがおり、特に前者のDeweyは、知られるように、「プラグマティズム」(pragmatism)の見地から、実験主義あるいは道具主義の立場に立った論理学・倫理学および教育哲学の体系を創り上げた人であるが、その彼はMeadにとって最も親交のあった人であり、その親交はMeadの死ぬまで続いたし、また、後者のCooleyは『人間性と社会秩序』(*Human Nature and the Social Order*, 1902)、『社会組織』(*Social Organization*, 1909)、そして『社会過程』(*Social Process*, 1918)のいわゆる三部作で、アメリカにおける心理学的社会学を完成させたといわれるが、その彼の「同情的想像」(sympathetic imagination)の考えは、Meadの「他者の役割取得」(taking the role

of the other)の下地となった。

Mead は1894年 Dewey と共に新設のシカゴ大学に移り、はじめ哲学部の助教授であったが、8年後の1902年には准教授に昇進し、さらに5年後の07年には正教授となった。Dewey が1905年コロンビア大学へ去って行くまでの十数年間はいうに及ばず自らが死ぬまで、Mead も Dewey 的思想伝統の一翼を形成し——例えば、Mead 自身が「アメリカ的背景におけるロイス、ジェイムスおよびデューイの哲学」(“The Philosophy of Royce, James, and Dewey, in their American Setting,” *International Journal of Ethics*, Vol. XL, 1930)や、「ジョン・デューイの哲学」(“The Philosophy of John Dewey,” *International Journal of Ethics*, Vol. XLVI, 1936)といった論文を発表していることを、ここでは想起するだけで充分であろう——、Dewey の思想活動が幅の広さにおいて目立ったのに対して、Mead のそれは錐もみ式の深さを示した点で注目される。1931年の秋から Dewey が既に移っておるコロンビア大学へ、Mead 自身も後を追って行く予定をしていたが、同年9月に病気のため永遠に帰らぬ人になってしまった。この時彼はまだ58歳の若さであった。なお、35年間の長きにわたって生活を送ったシカゴの当時の社会状況は、資本主義の発達に伴う産業化・都市化の進行、そして移民の大量流入によって、いくつかの矛盾が顕在化してきたが、こうした諸問題も彼の思想形成に大きな影響を与えたことも決して見落としてはならないであろう。

次いで、Meadの研究業績に目を転ずると、アメリカの社会学者Maurice Natanson (1924— )が、その著『ジョージ・H・ミードの動的社會理論』(*The Social Dynamics of George H. Mead*, 1956)のなかで、「ミードはすばらしい講演者であり対談者ではあったけれども、それと同じほどには著述の才にはめぐまれていなかった」<sup>(2)</sup>と記述しているように、生前には書評などまでも含めても70篇——もっとも、重要な論文は定期刊行誌『アメリカ社会学雑誌』(*American Journal of Sociology*)、『哲学雑誌』(*Journal of Philosophy*)、『国際倫理学雑誌』(*International Journal of Ethics*)等に発表してはいるけれども——を発表しただけで、著書は全然なかった。それ故、彼の死後に、弟子のCharles W. Morris (1901— )らが中心となって、Meadの草稿や講義ノートからなる4冊の遺著を公刊した。それらはまず、彼の死の翌年に、過去、現在、未来の時間的広がりを取り扱った『現代の哲学』(*The Philosophy of the Present*, ed. by Arthur E. Murphy, 1932)が出版され、以後二年目毎に、象徴的相互作用、役割取得、自我、精神、社会等を問題とした『精神・自我・社会——社会的行動主義者の立場から——』(*Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, ed. by Charles W. Morris, 1934)、ロマン主義から自我を問題にした『19世紀における思想の動向』(*Movement of Thought in the Nineteenth Century*, ed. by Merrit H. Moore, 1936)、そして、人間の行為や「パースペクティブ」(perspective)を問題とした『行為の哲学』(*The Philosophy of the Act*, ed. by Charles W. Morris, 1938)が世に問われていった。こうして、「一般にミードの名声が定まったのは、ようやくその没後のことであった」<sup>(3)</sup>とは、アメリカの社会学者Lewis A. Coser (1913— )の指摘しているところである。

ところで、既述のようなMeadの遺著4冊に加えて、Meadの特に社会心理学に関する論文集として、『ジョージ・ハーバート・ミードの社会心理学』(*The Social Psychology of George Herbert Mead*, ed. by Anselm Strauss, 1956)が刊行されているし、また、彼の珠玉の論文を集めたものとして、『選ばれた著作集』(*Selected Writings*, ed. by Andrew J. Reck, 1964)が出されているし、さらに、特に彼の哲学に関する論文集として、『G. H. ミード社会哲学試

論』(G. H. Mead, *Essays on his Social Philosophy*, ed. by John W. Petras, 1968)も出版されている。そして、最も新しいところでは、Meadの1914年と27年の社会心理学の講義録とそれ以外の3本の論文を集めた『ジョージ・ハーバート・ミード——自我・言語・世界——』(George Herbert Mead: *Self, Language, and the World*, ed. by David L. Miller, 1973)も世に問われてはいる。

けれども、わが国において、彼の著書中唯一の訳書をもつ『精神・自我・社会——社会的行動主義者の立場から——』(以下『精神・自我・社会』と略称)が何といてもMeadの社会学や社会心理学の分野での文字通り主著であって、われわれもこの著書を主要な検討対象とし、その補足的な意味で『行為の哲学』等の諸著作を取り上げ、本稿での主要テーマであるMeadの「社会的行動主義」の視座および「自我」論を再検討しても、それほど問題はないであろう<sup>(4)</sup>。

### III. Meadの「社会的行動主義」の視座

George H. Meadの主著『精神・自我・社会』の編集者であるCharles W. Morrisが添えた「序文——社会心理学者並びに社会哲学者としてのミード——」(Introduction: George H. Mead as Social Psychologist and Social Philosopher)において、「ミードは哲学的にはプラグマティストであり、科学的には社会心理学者であった。彼は古い伝統——アリストテレス、デカルト、ライプニッツ、ラッセル、ホワイトヘッド、デューイの伝統——に属しており、それは科学の諸活動と哲学との間に鋭い分離や対立を認めないものであり、また、これらの人々は自ら科学者であると同時に哲学者でもあった」<sup>(5)</sup>と記述しているように、Meadは哲学者より厳密には社会哲学者であったと同時に、科学者より正確には社会心理学者でもあった。そして、上述のMorrisの紹介のなかにも示されているように、哲学者としてのMeadはプラグマティストであった。

ところで、プラグマティストが提唱する哲学つまり「プラグマティズム」(pragmatism)とは、知られるように、その根底にイギリスの哲学者であって近世哲学の祖の一人と呼ばれるFrancis Bacon(1561-1626)以来の経験論の影響を色濃く残しながらも、アメリカという新しい土壌に根差した独特の社会・哲学思想である。すなわち、幾分説明を加えれば、「プラグマティズム」とは、アメリカの哲学者であったCharles S. Peirce(1839-1914)が1877年に初めて用いた言葉であって、後に同国の哲学者で心理学者でもあったWilliam Jamesがこの語を用いて自説を展開するに至って有名になったものである。そして、この「プラグマティズム」とは当時のアメリカ社会が大きな影を落としている。つまり、当時のアメリカ社会においては、一方では産業革命の進展に伴い工業化や都市化、その都市化にあってもスラム化といった急激な社会変動に見舞われており、他方ではアメリカ建国の基盤であったピューリタニズムの生活信条と、産業革命によってもたらされた科学・技術を重視する合理的な行為様式との摩擦が著しくなっていた。したがって、宗教と科学との間の矛盾を暫定的に調停し、それによって産業活動の効率を高めるものとして、またそれと同時に、産業化の過程で必然的に生ずる諸問題に対処しようとする哲学としての性格を要請されたのが、まさに「プラグマティズム」であったといえよう。このように「プラグマティズム」の成立を歴史的に辿っていくと、それは確かに「資本主義を準備する力」として、また「資本主義を擁護する力」として捉えることも出来、わが国でもその訳語に「実用主義」もしくは「実際主義」などをあててきた<sup>(6)</sup>。

さて、アメリカの「プラグマティズム」の創成期における思想家達は、「社会」(society)を人間が共同活動を遂行し、それを成就させる基礎的な「場」として捉え、そうした日常的な「場」の意味構造を人間相互の行為連関から解明しようとした。だが、Mead は自らの理論形成の基礎にこうした「プラグマティズム」のパラダイムを据えた上で、さらに社会的相互作用過程を重視する彼自身の立場を「社会的行動主義」(social behaviorism)と命名している<sup>(7)</sup>。では、Mead のいう「社会的行動主義」とはどのような視座に立つものであろうか。

われわれは、Mead の提唱する「社会的行動主義」が一つのアプローチとして、いわゆる「社会心理学」(social psychology)のなかに構想されている点に、まず注目してみたい。すなわち、彼の意図する「社会心理学」は、個人的有機体 (individual organism)の意識と行動とが彼の所属する社会集団にどのように依存しているかを研究するところに確定される領域である。そして、「社会心理学」がこうした領域にアプローチする際、Mead 自身が「社会心理学は一般に社会的経験のさまざまな局面を個人的経験に関する心理学の立場から扱ってきた。私が明らかにしようとするアプローチの要点は、社会という立場から、少なくとも社会的秩序にとって欠くことの出来ないコミュニケーションという立場から、経験を扱うものである」<sup>(8)</sup>と記述しているように、どこまでも「社会」より正確を期せば「コミュニケーション」(communication)という立場からのアプローチを重視している。このことは別言すれば、「個人心理学」(individual psychology)ではなくあくまでも「社会心理学」の研究領域が必要である、と彼にあっては考えられる。そして、その理由をやや長文ではあるが、Mead は次のように述べている。つまり「社会心理学が特に関心をもつのは、社会集団がその成員である個人の意識および行為の決定にどのような影響をもっているかという点である。もしわれわれが生まれる時個人の自我に植え付けられる実体的な魂などという概念を捨て去れば、われわれは社会心理学者の特別な関心として、個人の自我および彼の自我意識の発達を、彼の経験領域のなかでおこるものとみることが出来るだろう。そう考えれば、個人的有機体と彼の所属する社会集団との関係を、研究することに関心をもつ心理学の一定の諸局面があり、それが一般心理学の一部門としての社会心理学を構成する。こうして個人的有機体あるいは自我の意識と行動とが、その所属している社会集団にどのように依存しているかを研究するところに、社会心理学の扱う領域が確定される」<sup>(9)</sup>と。

次いで、Mead が彼自身の立場を「社会的行動主義」と名付け、いわゆるアメリカの心理学者であった John B. Watson (1878-1958) 流の「行動主義」(behaviorism) = 「ワトソニズム」(Watsonism) に対する批判を明確に打ち出している点へと、われわれの検討を進めることにしよう。

Mead の「社会的行動主義」は「主体 (subject) - 客体 (object) 」を二元論的に切断するのではなく、互いに他を含みながら進行する「過程」(process) とみなしているところにユニークさを有している。そうした理解は、カナダの社会学者である Tom W. Goff もその著『マルクスとミード — 知識社会学への寄与 — 』(Marx and Mead: Contributions to Sociology of Knowledge, 1980) のなかで、「ミードは、マルクスと同じく、決定論的視座と観念論的視座との統合をはかろうともくろんでいた」<sup>(10)</sup>と指摘しているように、従来の实在論と観念論とを共に否定し、いわゆる両者の統合を目指す、つまり、今日の社会科学論の脈絡に置き換えれば、「方法論的客観主義」と「方法論的主観主義」の双方を統合しようと企図したものである<sup>(11)</sup>。

さて、Mead は基礎的素材を「内的および外的側面」を合わせ持つ「行為」(act) に求めている<sup>(12)</sup>。それというのも、「行為」を研究対象とすることは、個人主体説に基づいて「行動」

(behavior)を生物学的な本能から説き明かそうとする「本能心理学」(instinctive psychology)への批判と、「行動」を観察可能な「刺激(stimulus)―反応(reaction)」図式によって、機械的に説明することに終始するそれまでの「行動主義」つまり「ワトソニズム」への批判とを、同時に内包しているからである。わけても、後者の点に若干説明を加えれば、Watsonが客観的に観察することの出来る「行動」だけが科学的心理学の分野を形成すると主張し、「精神」(mind)や「意識」(consciousness)の概念を誤謬として斥け、これらをすべて条件反射に還元しようと企図したが、Meadはこれに反対し、「この試みはいうまでもなく方向を誤っており、不成功に終わっている。何故かという、精神または意識のようなものの存在は、何らかの意味において承認されなければならないからである」<sup>(43)</sup>と批判している。そして、彼は「私達の主張しなければならないことは、客観的に観察出来る行動が、個人の内部に表現されるということであり、それは別の世界すなわち主観的な世界でという意味でなく、その個人という生物体の内部にあらわれるという意味においてである。このような行動のあるものは、われわれが態度と名付けてよいもの、すなわち、いろいろな行動の端緒のなかにあらわれる」<sup>(44)</sup>と記述し、「精神」や「意識」をも「態度」(attitude)として、彼自身の「社会心理学」の領域内に取り入れている。

そこで、「行為」の内部がどのような構造をもっているかの分析検討に Mead は迫られ、それについて正面から論考したのが『行為の哲学』である。したがって、ここで彼の『行為の哲学』における所論の骨子を記述しておこう。

一般に、有機体の目標追求行動は「一つの進行する出来事」として、「衝動」(impulse) → 「知覚」(perception) → 「達成」(consummation)の過程を経緯するとみなされるが、人間有機体のそれは、「衝動」 → 「知覚」 → 「操作」(manipulation) → 「達成」の過程を経緯する、と考えられる。そして、このように「操作過程」を経緯する点に人間の合理的・理性的存在たる所以がある、と Mead は考えている。

そこでまず、人間の「行為」の第1段階は「衝動」(impulse)である。Mead は人間の「行為」を環境への「適応過程」(adjustment process)として捉えると共に、「衝動」とは、人間と環境との間に適合を欠く「問題的状况」(problematic situation)から生ずる刺激に対して、人間が最初にとる「反作用の態度」である、と解している<sup>(45)</sup>。そして、この「反作用の態度」が人間に意識される時、それは問題の刺激を説明する態度となる。説明とは、人間に適切な反応を引きおこしそこねた対象を、この挫折が未来において避けられるように再構成することである。それ故、この「衝動」段階では、人間は対象に対して説明の態度をとることで、環境との関係の再構成へ向けて「行為」を開始することになる。

次いで、人間の「行為」の第2段階は「知覚」(perception)である。「知覚」とは、Meadによれば、「高度に発達した生理学的な生物体と対象もしくは一定の要素が選択されている環境との間の関係」<sup>(46)</sup>として定義されている。そして、この関係は「持続性」(duration)と「過程」とを含んでいる。つまり、感覚器官において持続的な環境の諸特性は、われわれにおける過去の経験とその未来へ向けての方向付けの過程とを、現在という時間のなかに内的にうみ出している。この「知覚」の世界においては、われわれの身体的な行動の停止において、ある「知覚」対象とわれわれとの間に一定の関係が成立する。

そして、Meadはこの「知覚」対象に向けてのわれわれの態度に、次の二種のあることを指摘している<sup>(47)</sup>。つまり、その一つは「直接的経験(immediate experience)の態度」であり、「知覚」対象はただ眺められ感じられるものとして単にそこにある。この場合、その対象はわれ

われの意識あるいは知識の対象とはならない。残る一つは「反省的分析 (reflective analysis) の態度」である。そして、この態度において「知覚」対象とわれわれの関係が意識される。それ故、この場合「知覚」対象はわれわれと「離れた」(distant) ものとして経験される。こうした「知覚」された対象とわれわれとの関係は、Mead にあっては「パースペクティブ」(perspective) として捉えられる。要するに、Mead の「社会的行動主義」は観念論と実在論とを克服するものとしての「プラグマティズム」に立脚する。そして、実在は観察者の側にのみある——観念論——のではなく、対象のなかにある——実在論——のでもなく、両者の関係として成り立つところの「パースペクティブ」のなかにあるというのが、その基本的立場である<sup>(18)</sup>。

続いて、「知覚」段階での離れた経験において把握された対象は、「行為」の第3段階たる「操作」(manipulation)をまっとうする。「操作」とは端的にいえば対象を「手で摘むこと」である<sup>(19)</sup>。この段階にあらわれる対象の実在は、Mead にあっては次に示すような現実の三つの局面と関連している。すなわち「(1)操作領域における対象という現実、(2)反省的知覚の世界における離れた対象という仮定的な現実、(3)空間——時間世界における離れた対象という未来的現実」<sup>(20)</sup>がそれである。したがって、それぞれに幾分説明を加えれば、(1)は「操作」された対象との事実的な接触経験に関するものである。私の手で握られ振りあげられ使われるものとしての、私がガンガン打ちつけるハンマーがそれである。(2)は離れた「知覚」される対象に関するものである。私が現在位置しているところから、6フィート離れたテーブルにのっているハンマーがそれである。この場合には、ハンマーはある典型的なやり方で取り上げられ手に握られ、一定の目的のために使われるべく、そこにあるものである。そして、(3)は有機体を待っているところの、いまだ与えられない可能的な「知覚」に関するものである。ここにある、このテーブルの上ののっている、このハンマーではない、「ハンマー」そのものが、Mead の第三の区別で示そうとした例になろう。

ところで、この「操作」の段階にあらわれる対象は、人間の「反省的知性」(reflective intelligence)を前提としている。そして、この「反省的知性」こそが「精神」(mind)の特質として、人間を他の生物から峻別しうるもの、と Mead は考えている<sup>(21)</sup>。そればかりか、この「反省的知性」が担う解釈活動を通じて「身振り」(gesture)は、人間集団に共通した反応を呼びおこす「シンボル」(symbol)へと転換する。つまり、「シンボル」とは、相互作用を行う者に対して「反省的知性」を介して、前以ってそれに対する反応が与えられている一種の刺激である、ということが出来よう。そして、その「シンボル」の典型的な形態として挙げられているのが、「言語」(language)なのである。つまり、Mead によれば「言語」とは、それを使用する諸個人に有意味性を指示し、さらに合理的な行為へと導く装置ということになる<sup>(22)</sup>。そして、彼はこの「言語」を媒介とした相互作用が個人に内面化されるところに、思考が成立すると考えている。

なお、Mead の説く「シンボル」についてわれわれが見落としてならないことに、次のことがある。つまり、「シンボル」を媒介として他者との、あるいは社会的諸対象との相互作用こそが、「コミュニケーション」と呼ばれるものであることを。そして、この「コミュニケーション」を通して個体は社会化を果たし、また、「コミュニケーション」において自ら相互作用の一般構造を再生産し、維持していくのである。それ故、Mead の「社会的行動主義」理論は「コミュニケーション」論として展開されている、といえよう。こうした意味において、わが国の鶴見俊輔(1922— )がその著『アメリカ哲学』のなかで、「G. H. ミード」の章を1章設け、そこで

「『個人』も『自我』も、『精神』も『経験』も、社会的なものとして発生の時からあり、それらは、『コミュニケーション』をとおして出現するのだ。こうして、『コミュニケーション』が、人間の精神現象を分析する根本的なカテゴリーとしておかれる。ミードの哲学は、根本的にコミュニケーションの哲学であり、その性格は、パースにも、ジェイムズにもはっきりしていないもので、ミードとともに出現したものと言える」<sup>(23)</sup>と指摘している点も大いにうなずけよう。

最後に、目標として想定された対象とわれわれの関係は、具体的な「操作」段階を経て、一定の評価をうけてわれわれのものとなる。この段階を Mead は「行為」の第4段階として「達成」(consummation)の段階と呼んでいる。それ故、「達成」とは「行為」の目標の成就であると同時に、対象に価値を付与するものでもある。そこでは対象は「所有され、善、悪どちらでもよい、美、醜、愛らしい、有害」等の価値を付与されるのである<sup>(24)</sup>。

以上が人間の「行為」の四つの段階であるが、要するに、Mead にとっては人間の「行為」は、何よりも人間と環境との特定の関係の破綻としての「衝動」をもって始まり、その「衝動」を充足するような環境との新たな適合的關係の形成をもって終わるものと観念されている。

#### IV. Mead の「自我」論

George H. Mead の社会学や社会心理学における主要関心は、何と云っても「自我」(self)の問題にある。つまり、彼の場合にもアメリカにおける William James、心理学的社会学派の代表者の一人であった James M. Baldwin (1861-1934)、John Dewey、社会学者であった William I. Thomas (1863-1947)、Charles H. Cooley 等と共に、「個人」(individual)と「社会」(society)の相互関係という、社会学や社会心理学における古くて新しい最も基本的な問題を、「自我」の問題として正面から論究している<sup>(25)</sup>。

さて、主著『精神・自我・社会』における Mead の最大の狙いは、「自我の個人説」(individualistic theory of the self)、つまり、これは初めに「自我」があって、その「自我」と他者との相互作用から社会が形成されるとする説であって、この説は Cooley によって支持されているけれども、このような立場に反対して、「自我の社会説」(social theory of the self)、すなわち、これは初めに社会があって「自我」はそこでの他者との相互作用から生まれるとする説であるが、この説の妥当性を彼自身主張することにある<sup>(26)</sup>。

では、Mead にあっては具体的にどのような所論が展開されるであろうか。まず、Mead は「自我は発達していくものである。自我は誕生した途端に既にあるものではなく、社会的経験や活動の過程に含まれている他の個人達との関係形成の結果として、ある個人のなかで発達するものである」<sup>(27)</sup>と記述し、「自我」は人間の社会的経験、より正確には社会的相互作用を通してのみ発生し、形成されるものであることを確認している。けれども、すべての社会的経験ないしは社会的相互作用が「自我」と関係しているわけではない。自己と他者とを区別するところに成立する「自我」は意識的なものである。それ故、習慣的な行為や単なる知覚的経験は、その限りでは「自我」の経験には含まれない。

次いで、Mead は「自我」の社会的形成を追究するにあたって、「自我」と「身体」(body)とを区別することから始めている。というのも、両者の間には以下にみるような意味深長な一連の相違点がみられるのであって、これらの相違点は同時に広範な哲学的諸含意を伴っているからである。「身体」は現実世界の一つの实在構造としてあるがままにそこにありうる。これに対して、



「自我」は「それがそれ自身にとって対象 (object) であるという特徴があり、この特徴があるから自我はその他の対象や身体から区別出来る」<sup>(28)</sup> ののである。そして、決定的な相違点として、「自我」はそれ自身を全体としてつまり一個の「自我」として反省的に把握する能力をもっているのに反し、「目は足を見られるが、身体の全体を見はしない」<sup>(29)</sup> ように、「身体」は自己反省をしないということがある。したがって、「自我」の反省的特質こそが、「自我」をいかなる対象とも質的に異なるものとして区別する目安となる。否そればかりか、このような反省的特質があるからこそ、われわれは「自我」を意識的なものとみなすことが出来るのである。要するに、「自我」が反省的であるということは、「自我」が「主体」(subject) であると同時に「客体」(object) であることを意味するのである。

それでは、「自我」がそれ自身に対して「客体」ないし「対象」となること——別言すれば、自我意識の発生するメカニズム——は如何にして可能であろうか。Mead が「人間が自分自身を経験するのは、直接的ではなく間接的である。つまり、同じ社会集団の他の個人メンバー達という特殊な観点から、あるいは彼が属している社会集団全体という一般化された観点からである。何故なら、彼は直接的にでも無媒介的にでもなく、自分自身にとっての主体としてでもなく、丁度他の個人達が彼にとってもしくは彼の経験のなかで対象であるのと同じに、まず彼自身にとっての対象となった時にのみ、自我もしくは個人として自分の経験に這入り込んでいくからである。そして、彼や他の個人達が一緒に含まれている社会環境もしくは経験や行動の文脈の内部で、彼自身に対して他の個人達がとる態度を採用した時にのみ彼は彼自身にとっての対象となる」<sup>(30)</sup> と述べているように、個人は自分に対して他者の態度ないし「他者の役割取得」(taking the role of the other) を行うことによってのみ、あるいは他者の観点から、つまり、Mead 自身の表現を借りれば、「他者のパースペクティブに入る」(entering into the perspective of the other) ことによって、自分自身を見ることによってのみ、自分自身に対して対象つまり「自我」となる。

そこで、Mead は子供の観察を通して他者の役割取得の行われる状況を、二種の段階すなわち「プレイ」(play) の段階と「ゲーム」(game) の段階とを区別して説き始める。つまり、単純な役割取得のレベルにとどまる「プレイ」の段階では、彼が「子供は母親の振りをし、教師や警官の振りをして遊ぶ。すなわち、われわれの言葉でいえば異なった役割を採用する。……ある子供がある役割を覚え込む時、その子に特殊な反応もしくは反応群を呼びおこす刺激を自分自身のなかに持つことになる。……子供は他者に呼びおこすのと同じ種類の反応を自分自身に呼びおこす一群の刺激をもっている。そして、彼はそういう反応をしながら反応を一つの全体にまとめていく。これが自分の自我にとって自分が他者になる場合の一番簡単な形である」<sup>(31)</sup> と記述しているように、子供は特殊な他者の役割を気まぐれに演じているに過ぎず、その行動を予測することは困難で首尾一貫性も欠いている。

これに対して、「ゲーム」の段階においては、単に自分に割り当てられた特定の役割を演ずるだけでは不十分で、それに参加する全成員の役割を取得する準備が出来ていなければならない。Mead は「ゲーム」の例として野球を引き合いに出し、次のように説明している。すなわち、「野球のナインに参加したら、自分自身の守備位置に含まれている各ポジションの反応を知らねばならない。つまり、自分自身のプレイを遂行するため、他のポジションの人間がどうプレイするかを知っていなければならない。勿論、九つの全部を同時に意識していなければならないというのではない。けれども、時には三人も四人もが彼自身の態度のなかにあらわれねばならない。

例えば、送球しようとしている人、それを捕球しようとしている人等々。こういう反応が彼自身の振舞いに多少とも含まれていなければならない。このようにゲームの場合には、他者達の反応が見事に組織立てられているので、誰かのある態度はそれに見合った他人の態度を呼びおこすことになる<sup>(32)</sup>と。要するに、「ゲーム」は子供の生活が遊びで他人の役割を取得する段階から、言葉の完全な意味での自我意識を成立させるのに不可欠な組織化された役割を取得する段階へ、と移行していくことを象徴するものである。そして、「ゲーム」は「自我」の組織を可能にする論理をもっている。子供が他者の態度を取得し、その他者の態度が共通の目標について彼が実行することを承認している限り、彼は社会の有機的成員となっている。彼が取得する他者の態度が彼自身の直接的表現を統制することを承認している限り、彼は社会に属している。「ゲーム」には「組織化された他者」(organized other)あるいはある程度組織化されているという意味での「一般化された他者」(generalized other)であり、それが子供の直接的経験のなかに表現されている。「ゲーム」は組織的活動であり、それは統一性を与え、「自我」を形成する。

以上が子供の観察を通して「他者の役割取得」が行われる状況についての Mead の説明であるが、さらに人間個人が「ゲーム」の段階を乗り越えて、厳密な意味での「一般化された他者」と名付けるものの役割、換言すればコミュニティ全体の態度を取得する時、「自我」の決定的な発達が生起する。Mead 曰く「彼が所属している組織化された社会集団の態度を、そういう集団が従事している組織化された協同的な社会活動、あるいはかかる活動の集合に目を向けながら取得してはじめて、完全な自我を発達させるし、彼が発達させてきたものとしての完全な自我を保持しつづけるにちがいない」<sup>(33)</sup>と。要するに、他者の態度の取得という社会過程は、特殊化された他者の態度からより一般化された他者の態度＝「一般化された他者」の取得へ、という過程を辿ることになる。

では、これより Mead の「自我」論の核心をなす「主我」(I)と「客我」(me)に二分して論考している点の検討へと、われわれの歩みを進めよう<sup>(補註1)</sup>。

(補註1) 現代の社会学や心理学において、人間の社会生活に「演劇」(drama)の観点から接近、つまり「ドラマツルギカル・アプローチ」(dramaturgical approach)を試みた人々に、精神分析学を打ち立てた Sigmund Freud (1856-1939)、処女作『日常生活における自己呈示』(*The Presentation of Self in Everyday Life*, 1959)でマッキーヴァー賞を受賞し、今日大いに注目を集めている Erving Goffman、そして、ここで取り上げている Mead の三人の重要な人物がいる。因みに、Freud は心的舞台に三人の俳優——「イド」(id)、「自我」(ego)、「超自我」(super-ego)——を登場させ、モノドラマを演じさせる。Mead も「自我」の舞台に二人の俳優——「主我」(I)、「客我」(me)——を登場させ、以下に具体的にみるようなモノドラマを演じさせている。ところが、彼らとは対照的に、Goffman はさきに挙げた最初の主著で、人間存在が相互の心的生活を引き出し、また発見するのは、ただ日常生活の劇場のみであると主張し、パフォーマンスの劇場を「頭脳」から二人以上の人々が直接的に居合わせる対面的場面に移してしまっ、以下のような自己呈示の演劇を描いている<sup>(34)</sup>。

そこで、幾分説明を加えれば、まず、対面的場面とは、人が一般者として没している無名の者ではなく、相手との間、かかわりの一方の担い手としての自分が何らかの意図をもって登場する局面である。そして、対面的場面という限定された社会的状況においての行為は、「演技」(performance)の要素を含むことを指摘したのが、まさに Goffman である。そこでは、行為者は「演技者」(performer)であると同時に「観客」(audience)を意識した「自己イメージ」(self-image)の「演出者」(producer)にみだてられる。つまり、行為者にとって現出する他者は、行為の相手である

と同時に行為を見る存在でもある。さらに、行為者は行為の意図・内容とは別に、そして同時にその行為者自身についての何らかの「情報」を自己呈示として相手に伝えている。行為者は相手が規定する自分のイメージを想定し、関係のなかにおいて「自己イメージ」を創発・定着させる。自己呈示ではなく「自己イメージ」の現出というのは、自己がその個人のなかにはなくて、外部に、相手との間にあるということの意味し、場面におけるかかわりのなかにある自己を、身体を持った自分とその相手にそれぞれ集約される形で、「自己イメージ」が現出するのである。別言すれば、自己と他者のかかわりが「自己イメージ」という形で結晶化されるのである。

次いで、「自己イメージ」をめぐる「演技」を支えるものに、Goffman は大別して二つの関心のあることを指摘している。すなわち、一つは広い意味での利己的関心であり、残る一つは同じく広い意味での利他的関心である。例えば、就職のために面接を受ける人などは、明らかに利己的関心から演技をする。つまり、被面接者は自分に有利な印象を人に抱かせるためばかりでなく、知らず知らずのうちに伝わるかもしれない自分に不利な印象をあらかじめさけるためにも、外見と態度に多くの注意を払うのである。これに対して、本物の薬だといって単なる気休め薬を与える医師や、心配症の女性運転手のために不要と思いつつも、真面目な顔をしてタイヤの空気圧を何度も点検するガソリンスタンドの従業員は、明らかに利他的関心からこのような演技を行っていることになる。何故ならば、この医師とか従業員は演技によって何か利益を得ようとしているわけではなく、むしろ、相手を安心させるために情報コントロールをしているからである<sup>(85)</sup>。

続いて、このようにみえてくると、20世紀最大の社会学者であったといわれる Max Weber (1864-1920) 以来の伝統的な行為論が、行為主体相互の関係のみにスポットをあて、行為の二側面——「遂行」と「呈示」——のうちの「遂行」の面にもっぱら科学的なメスを入れてきたのに対して、Goffman は、行為主体—行為の相手（別の行為主体）—観察によって、行為論あるいは社会関係論を展開する点で新しい視角に立つと共に、行為の「呈示」の面に新たにスポットをあてた点で、われわれは彼の所論に目新しいものを感じるのである。

Meadはまず人間の「自我」には二つの側面があることを想定している。すなわち、彼が「主我」とは他者の態度にたいする生物体の反応であり、客我とは他者の態度の組織化されたセットである。他者の態度が組織化されて客我を構成し、人はその客我にたいして主我として感応する<sup>(86)</sup>と記述しているように、一方に組織化された他者の態度をそのまま受け容れるところの「自我」としての「客我」を、他方で、それに対応する「自我」としての「主我」を考え、両者を区別し、位置付けている。そして、「自我」全体としては「主我」と「客我」の相互作用過程のうちに形成されるものである、と Mead にあっては考えられる。

なお、ここで注意すべきは、「主我」と「客我」の両者が常に調和ある状態に置かれているとは限らないということである。両者が調和しているのが当然であるとするならば、「自我」は基本的にはその属するコミュニティの組織のもつ「客我」として、経験のうちにあらわれることになる。そうであるとすれば、「客我」だけで十分であり、そこでは Mead があえて「主我」の概念を構築する必要がないであろう。しかし、彼は現実においてすべての「自我」が「客我」のように、他者や社会をそのまま受け容れる調和しているものとは考えなかった。少なからぬ人々が社会と必ずしも一致した状態にあるのではないことを見抜き、また、社会はその内部において、相互に完全に調和し合っているものではないことを感じていたのである。そして、社会における対立・矛盾・分裂は「自我」に反映されると考えられる。すなわち、「自我」内部における「主我」と「客我」との分離もしくは乖離がうみ出されると考えるのである。まさに、Mead の「主我」概念指定の意味の一つはここにある。

今この点について若干説明を加えれば、Meadの「自我」論においては、「主我」は「自我」の積極的・創造的側面を表わし、人間の自由や個性や自発性の観念をもたらし、新たなるものをうみ出す力を示すものとなっている。すなわち、Mead自身が「主我は客我にたいするものである。個人は権利だけでなく義務をもっている。彼は市民でありコミュニティの一員であるが、それだけでなく、……彼はこのコミュニティに反作用を与え、コミュニティへの反作用を通してコミュニティを変化させる人間でもある」<sup>(37)</sup>と記述し、また「組織化された態度のセットに含まれている社会状況へのこのような新しい応答が、客我に対応するものとしての主我を構成する。客我とは便宜的で習慣的な個人である。それはいつでもそこにいる。それは全員がもっている習慣や反応をもたねばならない。さもないとその個人はその社会のメンバーでありえない。しかし、ある個人は自己を表現するという方法で組織化されたコミュニティにたえず反作用している。……ここから新奇な何かが起こりうるものかどうかという一般的な問題が提起される。勿論実際には新奇なものがたえず出現していて、もっと一般的な術語である創発 (emergence) という概念が表現される」<sup>(38)</sup>とも記述している箇所が、まさに「主我」が「自我」の積極的な側面として、また、「客我」を超越する創発的で新奇な特質として、コミュニティに貢献することを示している。以上が「主我」の有する機能の第1の側面である。

次いで、「主我」の有する機能の第2の側面は、「主我」が「客我を呼びおこしするし、客我に反応もする」<sup>(39)</sup>ということである。「主我」は「自我」と選択する「自我」に直面する種々の諸対象からなる状況とを連結するものとして行為するが、統覚量としての「客我」はこのような「主我」のサービスを受けることによってはじめて、何らかの問題に対処すべく誘い出され、引き出されることが可能になる。それ故、「客我」は絶えず「主我」を通して喚起されている。「主我」と「客我」との間に介在する密接な関係は記憶についてみれば明らかになる。つまり、Meadが「記憶のなかの主我は、一秒前、一分前、あるいは一日前の自我のスポークスマンになる。所与としてそれは客我である。だが、それは以前は主我であったところの客我である。したがって、あなた自身の経験のどこに直接その主我が登場するのかと問われるならば、歴史上の人物として登場するというのがその答えである。一秒前にあなただったものこそが客我の主我なのである。その主我の役割を引き受けなければならないのはまた別の客我である。あなたはその過程のなかで主我の直接的な反応を得ることは出来ない」<sup>(40)</sup>と記述しているように、記憶には記憶するものとしての「主我」が存在するが、記憶された「自我」は常に「客我」である。記憶されたものは過去の「主我」から「客我」のなかへ流れ込んだものであり、現在の「主我」は次の瞬間の「客我」の部分として経験され、「客我」の「主我」は一瞬前の自分である。したがって、「主我」は常に「歴史像」(historical figure)として記憶されたイメージとしてのみ経験されるもので、行為の進行過程における「主我」を把握することは不可能である。

なお、上述してきたところからも幾分かは明らかのように、Meadにあっては「客我」は二つの側面をもつものとして、少なくとも理解されていることも、ここで付言しておきたい。

すなわち、その一つは、社会的役割取得によって構成された「自我」、あるいは内面化された社会規範をそなえた「自我」という側面を「自我」の「客我」が有する点である。Meadが「客我とは便宜的で習慣的な個人である。それはいつでもそこにある。それは全員がもっている習慣や反応をもたねばならないが、さもないとその個人はその社会のメンバーでありえない」<sup>(41)</sup>と捉え、また、「社会統制とは主我の表現に対抗する客我の表現である。それは全員が関心をもっている事業を遂行する手段として客我を主我がいわば活用出来るように限定を定め、裁判を下

す」<sup>(42)</sup>とか、あるいは「もしもフロイトの表現を借りるならば、客我とはある意味での検閲官である」<sup>(43)</sup>などと認識している箇所、この点を読みとることが出来よう。

残る一つは、過去における行為と思考の内容の総体、すなわち、人間の経験に絶えず付け加えられつつある個人の記憶が、Meadの「客我」には盛り込まれている点である。この意味での「客我」に欠落しているのは、今現在に見い出されるべき行為、つまり「客我」を乗り越えて新奇に創発するものである。それ故、このような欠落部分をもたない客我は、ある種の統覚量として、既に成し遂げられた過去の、目下効力のある現在の、成就の可能性がある結論された投射的未来の、それぞれの行為と態度とを包摂する。彼が「私は私自身に話しかけ、話したことやこれに付随していた情緒的内容を記憶している。この瞬間の主我は次の瞬間の客我のなかに現存している」<sup>(44)</sup>と記し、また、「所与としては客我しかない。しかし、その客我は以前には主我であった客我である。……一秒前にあなただったものこそ客我の主我なのである。この役割を採用しなければならないのがもう一つ別の客我である」<sup>(45)</sup>と記述している箇所などに、「客我」のこうした含意を読み取れよう。

なお、この節を終えるにあたって、Meadの「自我」論の核心をなす「主我」と「客我」の二区分による論究は、それ自身多くの優れた洞察を含みつつも、現代の「象徴的相互作用説」を提唱している人々の多くが指摘しているように、同時に曖昧な点も種々含まれている——ここで、一例を挙げれば、Meadの「主我」は、彼自身「現実には主我は客我の一部としてあらわれる」<sup>(46)</sup>と捉えているように、ある時には「客我」の一部であったり、またある時には、一瞬前の「客我」であったり、さらには社会的な「客我」に対抗する「自我」の側面であったり、衝動的・創造的な「自我」の部分であったりもする——ことを付記しておこう<sup>(補注2)</sup>。

(補注2) Meadはその「自我」論において、「自我」を「過程」(process)として捉えているか、それとも「構造」(structure)として捉えているかをめぐって、今日「象徴的相互作用説」を提唱する人々の間で、論争の的となっている。すなわち、シカゴ大学時代直接指導をMeadから受けた直弟子のHerbert G. Brumerは、Meadが「自我」を「構造」としてではなく、「過程」として見ていた、と主張し、この点でMeadは「自我」をなんらかの「構造」をもつ実体的なものとして捉えようとする大部分の研究者とは一線を画する、とみる。否そればかりか、「自我」を「構造」に内在させようとする研究者の図式は、Brumerをしていわしめれば、そのみが「自我」をうみ出し、形づくるところの「内省的過程」(reflexive process)を見逃しているが故に、意味をなさない、<sup>(47)</sup>と。

これに対して、小集団における相互作用過程分析を通じて、体系としての集団の機能的要件を析出したRobert F. Bales(1916-)は、Meadの「自我」を、「主我」を「過程」として、「客我」を「構造」として捉えるのが正しい、と考え、Brumerの説く「自我」=「過程」説は「主我」の側面を面的に強調したものである、と批判している<sup>(48)</sup>。

さらに、このようなBalesの批判に答えて、Brumerは次のように論駁している。曰く、Balesが議論を持ち込んだ「主我」と「客我」とは、Meadによって進行中の「過程」の両側面とみなされていたのであり、一方の「主我」が「過程」で、残る一方の「客我」が「構造」であるなどというのはナンセンスである。Meadは「自我」を「主我」と「客我」との組み合わせとしてではなく、両者の間の相互作用として見ていたのである<sup>(49)</sup>と。

ところで、その後この論争に加わったウイソコンシン大学のJoseph Woelfel(1940-)や、ミネソタ大学のGregory F. Stoneとニューヨーク州立大学のHarvey A. Farberman(1939-)らは、Brumerの見解よりも、むしろBalesのそれを基本的に支持している<sup>(50)</sup>。

## V. おわりに

われわれは、George H. Meadの生涯と業績、Meadの「社会的行動主義」の視座、Meadの「自我」論について、これまで比較的忠実に彼の所論に耳を傾けてきた。それ故、最後に Meadの所説わけても彼の「自我」論に含まれる問題点・疑問点を若干指摘して、本稿の結びに代えることにしよう。

第1点は、アメリカの社会学者である Bernard N. Meltzer (1916— ) らは共著『象徴的相互作用説』(*Symbolic Interactionism*, 1975) を書き、そのなかで、Meadらの初期の所説を含めた総合的な「象徴的相互作用説」の批判を試みている。わけても、Meadに対して彼らは次の三点の厳しい批判を試みている。すなわち、第1は、Meadの枠組のなかの数多くの主要概念が曖昧であるか、もしくは科学的説明に要求される一貫性に欠けており、それは衝動、意味、精神、役割取得、主我、自我、自己意識、一般化された他者、対象、イメージ、態度、身振り、シンボルなどの彼の所説における鍵概念の不正確な多様な定義付けにみられるのである。第2は、Mead理論が人間行動の感情的・無意識的要素を殆ど全面的に軽視している点である。そして第3は、Mead理論が一定の方法論上の困難をもっていること、つまり、検証可能な手続きや技術の規定が明晰でないことである<sup>(51)</sup>。

そして、特に第3に関しては、Meltzerらの主張の背景に、「アイオワ学派」の「象徴的相互作用説」の方法論が働いていることは否めないであろう。何となれば、この派の指導的存在である Manford H. Kuhn らが、Mead理論特にその「自我」論のもつ曖昧さを厳しく指摘し、それをいかに経験的に捉えうるかについて研究を行っているからである。わけても、その具体的な成果が Kuhn らの提唱した「T.S.T.法」である。つまり「T.S.T.法」とは「自己態度についての20回答テスト (Twenty Statement Test of Self-Attitudes) 法」であって、被調査者に対し、一つの疑問「私は誰ですか」(Who am I?) という質問をぶつけ、それについての20の異なる回答を自由に書いてもらい、結果を内容分析して、人間の自己態度つまり「自我」を明らかにしようとするものである<sup>(52)</sup>。

第2点は、Meadが「自我」論のなかで観念化した「一般化された他者」は、全体社会を統合するもののように解しているけれども、それは現実的ではないとは、アメリカの社会学者であった C. Wright Mills (1916—1962) らの主張である。

すなわち、若干説明を加えれば、Millsらは次のように考えるのである。各個人の「一般化された他者」は単に彼にとって重要であった人々、また現在もなお重要であるような人々を指すのである。その間に一致がみられるのは、個人の意味のある他者が丁度「権威ある他者」である場合のみであって、すべてがそうであるとは限らない。その一致と差異とは個人の位置と経験によって決まる。同一の制度的位置についている人々は、同じような「一般化された他者」をもつであろうし、異なった経験をもつ人々は、一定の行為にたいしてまったく異なった「良心の苦しみ」を感ずるであろう<sup>(53)</sup>。個人の自己イメージを形成する「意味のある他者」は、個人の位置と経歴に依存し、それに制約されているのであり、したがって、各個人の自己イメージは必ずしも一致するものとはならないのである。しかも彼らによると、個人の自己イメージ形成に際して、他者の期待がそのままの形で内面化されるとは限らない、と考えられる。つまり、「もし、われわれについての他者の期待が、われわれの望むイメージと矛盾する場合には、われわれはそれらを拒否するであろうし、また、より同類的な他者からの確認のみを求めようとする」<sup>(54)</sup>のである、と。

第3点は、既に前節の最後のところでも指摘しておいたように、また、さきの Meltzer からも指摘していたように、Mead の「自我」論における「主我」概念の意味内容の曖昧さとその存在意義の不明確さを、ここで改めて取り上げねばならない。わが国の社会学者船津衛（1940—）は、Mead の「主我」概念の曖昧さが次の二点より生じてきていることを指摘している。すなわち、「一つに、それが現在時点においてよりも未来時点においてその姿を具体的に表わすものとしたこと、二つに、その強調する社会性が、あくまで小状況の社会やあるいは古き良き社会をイメージに描いていたことなどにその原因が求められよう。ミードおよび当時の科学の枠組は現在を直接的、経験的に捉えるものであり、時間的な広がりにおいて事象を理解することはきわめてむずかしかつたと考えられる。またミードの社会イメージは、社会の大規模化や内部的な複雑化、変容、対立や矛盾の発生を捉えるものとならず、そこから主我の形成と位置を明らかにするものとはならなかったのである。このようなことから、主我概念は客我概念にくらべて遜色を示し、その蔭が薄いものとなった」<sup>(55)</sup>と。

同様に、アメリカの社会学者である William L. Kolb（1916—）も、わざわざ「ミードの『主我』と『客我』概念の批判的評価」（“A Critical Evaluation of Mead’s ‘I’ and ‘Me’ Concepts,”）という論文を書き、そのなかで Mead の「主我」概念に批判の集中砲火を浴びせている。だが、Kolb の所説の具体的な紹介はミード著、稲葉他訳『精神・自我・社会』における訳者達による「解説」に譲るとして<sup>(56)</sup>、ここでは、Kolb が Mead は「客我」の性質に関しては特定化したが、「主我」については結局「自我」のなかの「客我」でない残余（residual category）を指しているに過ぎない、と指摘していると共に、Mead の「主我」概念は機能的に無用なものである、と述べ、むしろ一旦「主我」概念の放棄を迫ろうとさえしている<sup>(57)</sup>ことのみを記しておこう。もっとも、このような主張に対しては、イギリスの社会学者である Anthony Giddens（1938—）が、その著『社会および政治理論における諸研究』（*Studies in Social and Political Theory*, 1977）において、次のような反論を加えている。すなわち、Mead の社会哲学は、社会的相互作用における「主我」と「客我」の関係とパーソナリティの発展を基礎としている。しかし、Mead 自身の著作のなかでさえ、「主我」は社会的に決定された「客我」よりも曖昧な要素としてあらわれており、そこでは社会的に決定された「客我」の方がより詳しく議論されている。いわんや Mead の影響を受けた後継者達の著作の殆どにおいては、社会的自我が「主我」をまったく追い払ってしまっており、そうすることで、行為理論に「反省性」（reflexivity）を統合する可能性に基づいて、Mead が採った選択肢は排除されている。こうなると、「象徴的相互作用説」は、対面的相互行為に関心を集中する一種の「社会学的社会心理学」として、社会学的思考の主流のなかに簡単に同化されてしまうのである、<sup>(58)</sup>と。

ところで、Mead の「自我」論における「主我」概念の曖昧さは、確かに経験科学としての社会心理学もしくは社会学を志向するという文脈からいって問題となるところであろう。けれども、むしろその曖昧さが問題となるのは、さきにも登場した Kuhn が指摘しているように、「主我」と「客我」をめぐる「決定論」—「非決定論」をどのように捉えるかという問題が、その根底に潜んでいるからであろう。すなわち、Mead の「自我」論における「主我」—「客我」関係における「決定論」—「非決定論」をめぐる多義性—「主我」が「非決定因」で「客我」が「決定因」であるという考え、「主我」と「客我」の両者とも「非決定因」であるとする考え、そして、「主我」と「客我」の両者とも同一とみられる事象についての決定因的結果であるのに、両者の相互作用（会話）はどうしたものか、それ自身非決定因的ないし創発的であるという考え—が

存在するのがそれである<sup>(59)</sup>。

そして、Meadの「主我」概念の意味内容がこのように曖昧なものでしかなかった最大の理由を、さきにも登場した船津はMead自身の人間観のうちに求めている。すなわち、Meadは自らの住む社会において対立や矛盾、そして分裂が次第に顕在化してくることを鋭く見抜くと共に、その問題の解決法が社会による人間個人の押しつぶしに求められるのではないかと懸念した。別言すれば、Meadはアメリカ資本主義の発達がそのまま多くの人々の幸せをもたらすと考えるほど楽天的ではなく、逆に、そこに社会統制が強化され、個人主義が衰退してしまうのではないかと危惧したのである。そこから自由で独立的な人間存在の崩壊の危機を回避するためには、社会矛盾の克服を「客我」によるのではなく、「主我」によってなされるべきである、と考えたのである<sup>(60)</sup>。

#### 注

- (1) Randall Collins and Michael Makowsky, *The Discovery of Society*, 1984, pp.13-14. (大野雅敏訳『社会の発見』東信堂 1987年、15頁。)
- (2) Maurice Natanson, *The Social Dynamics of George H. Mead*, 1956. (長田攻一・川越次郎訳『G. H. ミードの動的社會理論』新泉社, 1983年, 19頁。)
- (3) Lewis A. Coser, "American Trends," *A History of Sociological Analysis*, (eds. by Tom B. Bottomore and Robert A. Nisbet) Chap. 8. 1978. (磯部貞三訳『アメリカ社会学の形成』アカデミア出版会, 1981年, 83頁。)
- (4) George H. Meadの生涯と業績をまとめるにあたっては、特に Tamotsu Shibutamiによる *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol.10, 1968における“Mead, George H.”の頃(pp.83-87), 植田清次「ジョージ・ハーバート・ミード」『理想』第276号, 理想社, 1956年, 101-103頁, そして, 鶴見俊輔『アメリカ哲学』(上) 講談社, 1976年における第6章 G.H. ミード(120-145頁)等を参照した。
- (5) George H. Mead, *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, 1934における, 編集者 Charles W. Morris が書いた“Introduction: George H. Mead as Social Psychologist and Social Philosopher”の冒頭 (p, ix)に、Meadにたいするこのような紹介がされている。
- (6) 伊藤吉之助編『哲学小辞典』岩波書店, 1930年, 572頁参照。
- (7) Mead, *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, pp.1-41. (稲葉三千男他訳『精神・自我・社会——社会的行動主義者の立場から——』青木書店, 1973年, 4-45頁。)
- (8) *Ibid.*, p.1 (同訳書, 4頁。)
- (9) *Loc. cit.*(同上。)
- (10) Tom W. Goff, *Marx and Mead: Contributions to Sociology of Knowledge*, 1980. (河村望監訳『マルクスとミード——知識社会学への寄与——』御茶の水書房, 1982年, 118頁。)
- (11) 長野真理「G. H. ミードとプラグマティズム」『哲学』第76集, 三田哲学会, 1983年, 129頁参照。
- (12) Mead, *Mind, Self, and Society*, pp.7-8. (稲葉他訳, 前掲訳書, 9-10頁。) なお、Meadの「行為」(act)の概念は、当時の哲学的、心理学的領域で一般的に用いられていた概念であり、今日の社会学的な「行為」(action)の概念より広いものであろう。そして、この論文では人間の「主意主義的」な行動の局面に用いられているものを「行為」とし、単なる身体的あるいは習慣的な行動の局面を「行動」(behavior)と表現することにしたい。



- (13) *Ibid.*, p.10. (同訳書, 13頁。)
- (14) *Ibid.*, p.5. (同訳書, 8頁。)
- (15) George H. Mead, *The Philosophy of the Act*, (ed. by Charles W. Morris) 1938, pp. 3-6.
- (16) *Ibid.*, p.8.
- (17) *Ibid.*, pp.14-15.
- (18) 長田攻一「G. H. ミードの『社会的行動主義』についての一考察——パースペクティブ論を中心として——」『文学研究科紀要』第29輯、早稲田大学大学院文学研究科、1983年、44頁参照。
- (19) Mead, *The Philosophy of the Act*, p.24.
- (20) George H. Mead, *The Philosophy of the Present*, (ed. by Arthur E. Murphy) 1932, p.125.
- (21) Mead, *Mind, Self, and Society*, p.90. (同訳書, 99頁。)
- (22) *Ibid.*, p.122. (同訳書, 133頁。)
- (23) 鶴見俊輔『アメリカ哲学』(上)、講談社、1976年、133頁。なお、Meadの社会理論の根底に「コミュニケーション」論が介在する、という認識に立って書かれた著書や論文に、次のようなものがある。後藤将之『ジョージ・ハーバート・ミード——コミュニケーションと社会心理学の理論——』弘文堂、1987年、1-268頁や、山田重樹「G. H. ミードのコミュニケーション論」『立命館産業社会論集』第27号、立命館産業社会学会、1981年、57-102頁等である。
- (24) Mead, *The Philosophy of the Act*, p.25.
- (25) そのような意味において、Meadの「自我」論を正面から論究した著書や論文も、既にわが国には多数発表されている。今管見の範囲でそれらを挙げてみても、船津衛『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣、1989年、1-254頁、越井郁朗「自我の社会的形成と役割取得——G. H. ミードの理論を中心として——」『ソシオロジ』第30号、社会学研究会、1962年、66-74頁、同「G. H. ミードにおける社会的相互作用と社会的自我」『法文論叢』第22号哲学篇、熊本大学法文学会、1967年、103-124頁、佐藤毅「シンボリック相互作用論の自我論」『一橋論叢』第81巻第2号、一橋大学一橋学会、1979年、103-124頁、平川茂「G. H. ミードの『自我論』再考」『ソシオロジ』第25巻第1号、社会学研究会、1980年、21-36頁、笠松幸一「G. H. ミードの役割取得行動論」『精神科学』第19号、日本大学文理学部哲学研究室、1980年、63-74頁、高橋信行「社会的自己について」『駒沢社会学研究』第16号、駒沢大学文学部社会学研究室、1984年、78-99頁、村井忠政「G. H. ミードとシンボリック・インタラクショニズム」『社会学評論』第24巻第4号、日本社会学会、1974年、44-62頁などである。
- (26) Mead, *Mind, Self, and Society*, pp.226-227. (稲葉他訳、前掲訳書、235-239頁。)
- (27) *Ibid.*, p.135. (同訳書、146頁。)
- (28) *Ibid.*, p.136. (同訳書、147頁。)
- (29) *Loc. cit.* (同上。)
- (30) *Ibid.*, p.138. (同訳書、149頁。)
- (31) *Ibid.*, pp.150-151. (同訳書、161-162頁。)
- (32) *Ibid.*, p.151. (同訳書、163頁。)
- (33) *Ibid.*, p.155. (同訳書、166頁。)
- (34) 丸木恵祐「日常経験と相互作用論——ゴッフマンのドラマツルギーをめぐる——」『社会学評論』第37巻第1号、日本社会学会、1986年、24-34頁参照。
- (35) Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life*, 1959, pp.1-259. (石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示——』誠信書房、1974年、1-301頁。)
- (36) Mead, *Mind, Self, and Society*, p.175. (稲葉他訳、前掲訳書、187頁。)

- (37) *Ibid.*, p.196. (同訳書、209頁。)
- (38) *Ibid.*, pp.197 -198. (同訳書、211頁)
- (39) Mead, *The Philosophy of the Act*, p.151.
- (40) Mead, *Mind, Self, and Society*, pp.174-175. (稲葉他訳、前掲訳書、187頁。)
- (41) *Ibid.*, p.197. (同訳書、211頁。)
- (42) *Ibid.*, p.210. (同訳書、224頁。)
- (43) *Loc. cit.* (同訳書、223頁。)
- (44) *Ibid.*, p.174. (同訳書、186頁。)
- (45) *Loc. cit.* (同訳書、187頁。)
- (46) *Ibid.*, pp.176-177. (同訳書、189頁。)
- (47) Herbert G. Blumer, "Sociological Implications of the Thought of George Herbert Mead," *American Journal of Sociology*, Vol. LXX I, No.5, 1966, pp.535-544.
- (48) Robert F. Bales, "Comment on Herbert Blumer's Paper," *American Journal of Sociology*, Vol. LXX I, No.5, 1966, pp.545-547.
- (49) Herbert G. Blumer, "Reply," *American Journal of Sociology*, Vol. LXX I, No.5, 1966, pp.547-548.
- (50) Joseph Woelfel, "Comment on the Blumer-Bales Dialogue concerning the Interpretation of Mead's Thought," *American Journal of Sociology*, Vol. LXXII, No.4, 1967, p.409. Gregory P. Stone and Harvey A. Farberman, "Further Comment on the Blumer-Bales Dialogue concerning the Implication of the Thought of George Herbert Mead," *American Journal of Sociology*, Vol. LXXII, No.4, 1967, pp.409-410. なお Woelfel らの見解に対しても、Blumer の反論が試みられている。Herbert G. Blumer, "Reply to Woelfel, Stone, and Farberman," *American Journal of Sociology*, Vol. LXXII, No.4, 1967, pp.411-412.
- (51) Bernard N. Meltzer, John W. Petras and Larry T. Reynolds, *Symbolic Interactionism*, 1975, pp.1-144. 佐藤、前掲論文、105頁参照。
- (52) Manford H. Kuhn and Thomas S. McPartland, "An Empirical Investigation of Self-Attitudes," *American Sociological Review*, Vol. 19, No.1, 1954, pp.68-76. 同様な指摘が Collins と Makowsky の *The Discovery of Society* のなかにも見られる (大野訳『社会の発見』225頁。)
- (53) Hans H. Gerth and C. Wright Mills, *Character and Social Structure*, 1953, p.95. (古城利明他訳『性格と社会構造』青木書店、1970年、110-111頁。)
- (54) *Ibid.*, p.111. (同訳書、123頁。)
- (55) 船津衛「自我論の展開」『東北大学文学部研究年報』第30号、東北大学文学部、1981年、82頁。
- (56) 稲葉三千男他による Mead の『精神・自我・社会』の訳書に付された「解説」では、Kolb の Mead 批判が三点にわたって紹介されている(369-371頁。)
- (57) William L. Kolb, "A Critical Evaluation of Mead's 'I' and 'Me' Concepts," *Symbolic Interaction*, (eds. by Jerom G. Manis and Bernard N. Meltzer) 1967, pp.241-250.
- (58) Anthony Giddens, *Studies in Social and Political Theory*, 1977. (宮島喬他訳『社会理論の現代像』みすず書房、1986年、110-111頁。)
- (59) Manford H. Kuhn, "Major Trends in Symbolic Interaction Theory in the Past Twenty-five Years," *Social Psychology through Symbolic Interaction*, (eds. by Gregory P. Stone and Harvey A. Farberman, 1970, pp.72-73.
- (60) 船津衛『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣、1976年、115頁。

## A Study on George H. Mead

— His “Social Behaviorism” and “Self” Theory —

Shin OGASAWARA

(*Department of Sociology, Nara University of Education, Nara 630, Japan*)

(Received April 23, 1990)

This study examines four works by George H. Mead (1863–1931), an American sociologist, social psychologist, and philosopher; *The Philosophy of the Present* (1932), *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist* (1934), *Movement of Thought in the Nineteenth Century* (1936), and *The Philosophy of the Act* (1938). Its purpose is to understand his viewpoint of “social behaviorism” and his “self” theory. In this study, I shall first point out that Mead adopted “social behaviorism” as a methodology, and that its basic material was acts. Then, I shall try to show that as far as his analysis of the internal structure of act is concerned he presented his “social behaviorism” as a communication theory as well as a perspective theory. Concerning Mead’s “self” theory, I shall consider the fact that he definitely sided with the social theory of the self, which emphasizes that society is the locus in which the self develops through interactions with others. I shall also explore the meanings of his “I” concept and “me” concept, as one of the characteristics of Mead’s “self” theory is to divide the self into “I” and “me”. I shall further raise a few questions about his “self” theory, pointing out some difficulties with it.